

[巻頭言]

臨床の前途

臨床心理学科主任

増井 透

大学院に臨床心理学領域が設置されてから2年が経過した。臨床心理士に対する期待と要望は以前から根強いものがあるが、ことに青少年の心の問題にかかわる事件が世間を騒がすたびに、その役割の重要性が強調されてきている。実際、多数の臨床心理士が地道に忍耐強い活動を通して、さまざまなレベルで実績をあげていることは事実である。

しかし同時に、臨床心理士の機能や効果や位置づけなどについて、「限界」や「問題」が聞こえてくることも事実である。心の時代と称され、「トラウマ」「癒し」から「自分さがし」まで、ほとんど日常的問題であるように見える。そんな中、カウンセリングがブームだと言われるが、これは「カウンセラーになりたい」ブームであって、決してカウンセラーやカウンセリング自体が十分に認知されたわけではない、と思う。

臨床心理学は自然科学なのか、それとも技術あるいは洗練された経験知なのか。臨床心理学はもともとグレイゾーンにある、と決めつけると言い過ぎかもしれないが、少なくとも大学院での勉学の間に一度は面と向かっておくべき問題であろう。

心のケアの専門家としては、知識と経験とセンスと、そしておそらくは共感性と使命感に富む人間性が期待される。後半の要因はほとんど個人に帰属するとすれば、大学院では貪欲に知識を吸収し、与えられた機会をよき経験として身につけ、そして優れた先達の近くにいてセンスを養うことが必要になる。

かつて学部在籍された臨床の碩学はしばしば、血へど吐くまで勉強せよと仰せられたが、大袈裟な言ではなかろう。世間と接する機会の少ない研究者は、時としてはなはだしく世間知らずで非常識を批判されるが、臨床家には専門職にふさわしい知識を身につけるだけでなく、先述の要因を裏づけにした対人関係のあり方が求められるはずである。

臨床家の道は多難である。院生のポテンシャルに期待したい。